

第七回ホスピ川柳

選考結果&選評

2025



Meilleur Co., Ltd.
3-9-2, Yurinokidai
Yachiyo-shi
Chiba 276-0042
Japan

■総評 .. 高鶴礼子

今、この時、この瞬間の『私』が見つめているものを、この思いを、なんとかして伝えた
い、というお気持ちのあふれくる御作品に、今回もたくさん出逢わせていただくことができ
ました。私は、これを書きたい、というところを、まっすぐに見つめ、記そうとして下さっ
ている大勢の方々の『懸命』に、句の巧拙を超えたところにある『川柳』という表現手段との
誠実な向き合い』が感じられて、ありがたくなりませんでした。それを踏まえた上で、一
つお願ひがあります。雅号をしておられる方が多いのですが、雅号をお付けになるなら、
真つ当な号を、ぜひ。おふざけの様に思われてしまう様な雅号ですが、せつかくの御句が台
無しになってしまって、もったいないです。ぜひとも、ご検討下さい。

■大賞 .. 分かつてる 覚悟もしてる けど逝くな びつぐべいびー

■準賞 .. 駆け抜けた 母のたすきは 受け取つた 昆布

■佳作 .. 後掲の四作品

■名優賞 .. 後掲の六作品

■名優賞..ありがとう 言えぬ人にも 尽くしきる

たなか

「言えぬ人にも」の「も」が沁み来ます。《ここに描かれているひと》が向き合つておられるのは思いを口にすることができる方々のみならず、口にすることすらできなくなつてしまわれた方々でもあるのです。それは、ご両親、おつれあいといった方々であると同時に、お仕事で向き合つておられる患者さんなのかもしません、たとえ、どんなに懸命を尽くしたとしても、今は、もう「ありがとう」という言葉を聞くことすら叶わない……、けれど、たとえ、そういうであつたとしても。自分は少しでも今できることを果たすのみ、ただ、それだけなんだ——と。いつかは訪れる事になるであろう最期の刻限を噛みしめながら、でも、でも、を信じて大切な方々に対峙し続けておられる《ここに描かれたひと》。そのご誠実を思いました。

■名優賞・六度目の最期の桜 来年も

MD

「桜」を指す措辞が「最後の」ではなく、「最期の」となっているところが、じんと迫り来ます。《ここに描かれたひと》は、今、眼前に咲いてくれている「桜」を、ああ、これが私にとつての——あるいは《大切この上ない、このひと》と見る——「最期の桜」なんだ、という思いとともに見つめておられるに違いありません。おそらくは何かしらの理由で、《ここに描かれたひと》あるいは、《ここに描かれたひとにとつての大切な人》は余命宣告を受けられていらっしゃるのかと……。万感の思いを籠めて見つめた、その「桜」——。けれど、その方々は、なんと、六年もの間、生き延びていて下さっているのです。だからこそ「ああ、来年も」なのですよね。立ち上がりくる思いの深さに、たまらなくなつてしましました。

■名優賞・失つて初めて気づく当たり前

うなぎ大好き丸

おお、まさに。全く以て、その通りなのですよね。「失う」などという事態が生じる前に気づければ、いいだけのはずなのに、なぜか、そうできない、失つてからでないと気づけない『にんげん』という存在物の在り様。「当たり前」である、ということだが、どれほど、有難いことであったのか、そんなことすらをも、その「当たり前」を「失つて」からでないと気づけない——。『にんげん』という生き物が持つ、その心象。それがもたらす、どうしようもない苦境そして困惑が、そつと差し出されてあるところにハツとさせられてしまいます。「当たり前」は、そこに在つて当たり前。以上でも以下でもない、という認識が、とてつもない状況を連れてくるのだ、という指弾、その秀逸さに、大きく打たれました。

■名優賞…薰風にあなたの気配感じ取る

南平太

一読、ドラマが立ち上がり来ます。『ここに描かれたひと』が喰みしめておられる『「あなた」なるそのひと』——。そのひとが、生きておられるとも、故人であるとも、両方に読めるところが得難い語りと相成りました。いずれに読んでも、「あなた」なるその御仁は『ここに描かれたひと』にとって、無二の存在なのです。そうして、その『「あなた」なるひと』の「気配」を、『ここに描かれたそのひと』に感じさせる契機となつているのが「薰風」である、ということによつて、『「あなた」なるそのひと』に対し『ここに描かれたひと』が抱き続けておられる心象が、鮮明なかたちで示されることとなつて、いることにお気づきいただけるでしょうか。この句の良さはそこにあります。切ないほどのあたたかが眼目でした。

■名優賞..また来てね 帰りたいとは 言わぬ父

ななな

『ここに描かれたひと』のお父様は、今、おそらくは、ご自宅ではなく、老健施設の様など
ここで暮らしていらっしゃるのだと思います。この日は、久しぶりに、ご子息あるいはご令
嬢が、そんなお父様をおうちに連れて来られたのでしょうか。お父様の微笑んでおられるお顔
が見える様です。けれど、時は過ぎゆき、『帰る時間』は、やつて来てしまします。ここに
差し出されてあるのは、その一刻、「また来てね」と言うお子に対して、「帰りたい」とは、
決しておっしゃらうとはなさらない、お父様のお姿です。淡々とした語りの裡に、そつと刻
まれてある、お父様のお気持ち——。それに気づいた『ここに描かれたそのひと』。が、痛
いほど噛みしめておられる思いの、その切なさを噛みしめさせていただきました。

■名優賞・血管よ 逃げずにじつと そこ」にいて ナインナース

語りの立ち位置の秀逸さに、大きく頷きます。医療従事者の方々が対峙しておられる懸命を、こういうかたちで描出されたことによつて、この上もなく新鮮で、得難いお味の一匂とななりました。なるほど、こういうことがあるのですね、と、『ここに描かれたひと』を始めとする医療関係者の方々のそのご尽力に、ただただ、感じ入ること頻りです。何と言つても、眼目は、「血管」に対して、擬人法を採つて語つておられるところでしょう。それによつて、『ここに描かれたひと』始め、こうした状況に立ち向かつておられる方々の、患者さんに対する『なんとかして、少しでもいいかたちで』、という、お心のアクチュアリティーが、確と立ち上がりくる言揚げとなりました。いい視座に感謝！です。この調子で、と、心から。

■佳作…廊下へと 涌れる嗚咽の 午前二時

とよ爺

どうか、お願ひ、お願ひだから、何でもするから、だから、お願ひ、この人を連れて行かないで……と、眼前に横たわる大切なひとを見つめ、希い続けてきたその思いが、突然、断たれてしまうーー。ここに描かれているのは、そんな瞬間に他なりません。何をどう、しようとしても、どれほど、懸命に願ったとしても、眼前に差し出されてある状況は、もう、何も変わることはないのです。決して認めたくない現実を、それでも受け入れるしかない《ここに描かれたひと》。その人が、大切なひとの枕辺で洩らす「嗚咽」が、しんとした静けさの裡に聴こえくる様です。病室から「廊下」へと洩れ来るその「嗚咽」の、「午前二時」という刻限の指定が、夜通しの看病を想わせて、得難い切なさが宿り来るところが眼目でした。

■佳作 “ありがとう”なんて言つなよ まだ早い

やまとも

目の前に横たわっている『大切なひと』が、ふと目を開けて、突然、こんなことを呟いたのです、「ありがとう……、今まで、ありがとう」とーー。それを耳にした『ここに描かれたひと』は胸が締め付けられた様になってしまって、何言つてるんだ、止めてくれよ、まるで、最期のお別れの言葉みたいじやないか、と言葉を返します。その心情——如何ともし難い愕然が、この語りなのです。お願ひだから、そんなこと、言うなよ。そんな、今生の別れみたいな「ありがとう」なんて、「まだ早い」、早すぎるよ、とーー。どの様な関係の一二者であるのか、それは明示されていませんが、お互にとつての『大切なひと同士』であることに間違いないでしょう。こんなにも淋しい「ありがとう」があるので、と、改めて感じました。

■佳作　「私の名呼べぬ母呼ぶ何度も

つべる

ここに描かれている「母」君は、認知症ゆえに、子であるところの「私」の名を失念してしまわれていらっしやるのでしようか。それとも、意識混濁の状態でいらっしやるのかもしません。前者として読むことも可能ですが、ここは後者として解した方が、何倍もの衝撃が溢れます。「お母さん、私よ、あなたの娘はここにいるよ」と、懸命に母君に呼びかける《ここに描かれたひと》。虚ろな眼差しで、あるいは、確と見つめながらも、母君は、もう、お声を出すことができないでいらっしやるのです。大事な大事な我が子が目の前にいる、目の前にいてくれる、何とかして、と思つてみても、霞逝く意識は、子の名を呼ぶことすらも許してはくれないので。臨場感に溢れた造形から零れ落ちる母と子の真実（ほんとう）。たたただ、打たれました。

■佳作　・親孝行　まだ途中だよ　逝かせない

スミレ

結句の「逝かせない」という言い切りに万感の思いが立ち上がり来ます。さんざん、親不孝を重ねてきた俺が、せっかく、こうして「親孝行」のマネごとみたいなことが、やつと、しかも、ほんのちょこつと、できるようになつたのに、今、逝っちゃうなんて、絶対にダメだよ、だつて、「まだ途中」なんだもの。逝かせないよ、絶対に、絶対に、絶対に、逝かせない——と。子なる立ち位置にいる《ここに描かれたひと》の心象が、実在感たっぷりに差し出されているところにご注目を。これによつて、大いなる説得力が生まれ来ることとなりました。《ここに描かれているひと》が負うている《これまで》という刻限。ここに描かれた「逝かせない」は、それを踏まえての「逝かせない」なのです。どうか、どうか、と、心から。

■準賞 .. 駆け抜けた 母のたすきは 受け取った

昆布

「駆け抜ける」、「たすき」という縁語仕立ての下、「母のたすき」を「受け取る」というレトリックに託して語られる母と子の関り、そしてその在り様が、じんと、深と心に沁み来ます。「駆け抜けた」という言葉で語られる「母」なるそのひとの生き様——。何事があつても、自身を見失うことなく、しつかと独り立つて、今生を生き抜いていかれたに違いありません。そうして。その母君の《生きる》をど真ん中に据えた上で、ここからは俺が継いでゆく、と、子であるところの《ここに描かれたひと》は言うのです。修辞的確さによつて記されることとなつた《前を向くまなざし》。その見事なまでの爽やかさに、大きな拍手を送りたくなつてしまひました。

■大賞 .. 分かつてゐる 覚悟もしてゐる けど逝くな びつぐべいびー

今、まさに、逝きつつある大切なひとを前にして、悲鳴を上げる様にして揺れ動く心の在り様。それを、これほどまでにアクチュアリティーたっぷりに書き切つておられるところが秀逸です。「分かつてゐる」のです、そうして、それゆえ、「覚悟」もしてゐるのです。けれどー。それを、そのまま、すんなりと受け入れてしまえない何かが『ここに描かれたひと』の裡には在つて、それが大きくふくらみ続けているのです。分かつてゐるんだ、頭では理解している、だからこそその覚悟だつてある。だけど、それでもー。ああ、だめだ、享け入れられな。逝かないでくれ、お願ひだ、逝かないでくれ、ああ……、お願ひだ、お願ひだから、「逝くな」、逝つてくれるな、とー。確とんげんがいると言ひ得る得難い造形でした。

■ 第一次選考通過作品

毎日が 非日常だと 忘れない

消えゆく灯また灯す日を信じつつ

ありがとうございました三回言つて逝きました

「ありがとう」なんて父さん らしくない

動けない あなたのもとに走りゆく

あの鳥が 私とともに 空を往く

夢の中 じいじが蝉を 捕まえた

トイレ立つ父の両手のあたたかさ

昏睡の 父が微笑み 渡る川

忘却のさきにいつものその笑顔

来年も孫でいたいと泣いた夏

ごめんなさい 看護師として 謝ります

介護する その人もまた 介護され

また来るよ 外は晴天 母は雨

病気して 弱い自分が もう一人

温もりが 父の最期の 置き土産

「大丈夫」 父に最期の 嘘をつく

言えねんだ 昭和男は 有難う

生かされて まだ逝かないで 逝かないで

あーる

蒼音

蒼い空

あおちゃん

青トウガラシ

蒼豆

赤めがね

あきら

ake

あさ

浅井誠章

あさこ

明日があるじやん

あさのん

明日があるじやん

明日勝

あつきー

アツブダウン

時計より 命を見る この現場
握る手に 落ちた涙が 光つてゐる

優しい嘘 ついて御免と 言わせてよ

天国で 会えるその日が いつか来る

息を継ぐ 合図を待つて 夜が明ける

介護するわれより食べるわが母よ

帰りたい 出来る事なら 帰したい

目をつむる 母にはじめて 『ありがとう』

陰になり日向になりの介護です

死にたいと沈む夕日を引き上げる

ありがとうございます その一言で 夜が明ける

ありがとうございます そのひと言が 薬ですね

やつとでた 便と一緒に 涙する

お見舞いに 「さよなら」だけは 言わないで

伊藤聖子 いぬのか 居間正三 伊予の風 岩音

おはようと 今朝も言えたと 泣き笑い

世話かけて すまないなんて オレ息子

失つて 初めて気づく 当たり前

わかつてよ こちらも同じ 人だから

名前だけ 覚えてくれて 泣きました

あゆみ 575
アルサブア
あるふおんそ
あんどらーくら
医川

石井 香久

いたすいたすけ

いつちー

いつはるひか

いわ G

vuvu

うつしやん

うなぎ大好き丸

うなちゃんまん

梅村颯

どんどんと 変わるあなたを おぼえている
平凡に 過ごせた今日に ありがとう
通帳はあそこと言つて眠る母
沈まない 太陽でいて お母さん
泣きたくて泣いてる母の背をさする
どなたさん？ それでも親はあなたです
ではまたな ここはあなたの 家なのに
六度目の 最期の桜 来年も
指先で最後に書いたありがとう
ありがとう 最後の笑顔 忘れない
壊れても 壊れかけても 母は母
振りむけば 今を忘れる お母さん
父看取る 一緒に泣いて くれたひと
何度も 初めて出会う 母となる
声なき手 にぎるあたたか 生きて いる
点滴の しずくに託す 生きる意志
うすれゆく 母と唄つて 児に還る
祖父に似た 声に赤らむ 祖母の顔
まだ逝くなもつとさせてよ恩返し
話せない母に切り離さない
母さんの おかげりなさい 聞けぬまま

江戸川散歩
詠楽堂
えいこん
MD
エメラルド
エメラルドグリーン
エリカ
エリリン
エリンコ
黄金肘
大林ひかる
おかまさこ
翁シン
置楽
奥の寄道
おくら
ウリ

いつまでもデカい背中の父でいて
ばあちゃんの笑顔はいつも日本晴
ひと休み その瞬間に 急患だ
側にいる それが私の 出来る事
ありがとう 言えぬままでも 伝わつて
母の背の 荷物を下ろし 父が逝く
来世でも あなたは僕の 母さんだ
大嫌い でも生きていて お父さん
今日の母今日の私で介護する
また聞いた いいえ私に また効いた
思い出も 消失するの？ 認知症
病室で 母が子になり 子が母に
そばにいる ただそばにいる 最後まで
「頑張れ」より 「頑張ったね」と 言われたい
暗闇や夜の廊下で母を待つ
名前より 笑顔覚えて くれていた
杖つく手 昔つないだ あなたの手
あまりにも 準備がよくて また泣ける
につこりした 今日の笑顔は 何？ 母さん
ひと筋の なみだ無言の ありがとう
病室の空気を変える空の色

小島英美子
オタ少女
お茶
おつとりねこ
踊 ヘプバーン
オドントグロッサム
かあしゃん
ガイア
怪傑もぐり33世
傀儡師
カエデ・チャーチヤ
かおり45%
柿本佐留
花京院
かくかくしかじか
家具屋のねずみ
かぐや姫
カジ
かじなみと

母逝くな どうかいさせて 子のままで

不老まで望まないから不死でいて

今日もまた癒した人に癒される

いつからか 娘の私 お母さん

ほら母さんあそこに董父さんだ

ありがとう 言葉なくとも ありがとう

会う度に 私を忘れ 思い出す

忘れない 強い親父の あの姿

辛苦背に 最終章を 閉じし母

いかないで もう少しだけ ここにいて

昨日より ゆっくり歩く その勇気

のべた手を払つた人が泣くタベ

いるならば神よ私を身代わりに

誰だつけ そんな言葉が 突き刺さる

介護する 母に言われた 頑張るのよ

子を産んで育てて枯れて逝つた母

この背中押してくれたよその背中

手を焼いた 娘を今は 困らせて

要介護 向こう三軒 両隣

嫌ですよ 夫唱婦隨で 要介護

渡し賃 やらんぞ爺よ まだ逝くな

Kazu
カズマグドン☆

母に似た人が次々入所する
車椅子 握る手の皺 じつと見る

最後まで母の手だけは離さない

あと何度も桜一緒に見られるか

月が日が覗く病舎の白衾

ナースコール 呼ばれていくと 「さみしくて」

やり切つて 泣いた日今は 過ぎし日に

瓶の蓋開けることしかできぬ俺

名も知らぬ あなたの声に 救われた

この歩み 止めてなるかと 薬飲む

最期まで お世話になつた 感謝です

時間くれ最後に感謝伝えたい

いつまでも 甘えたかつた 最後まで

「もういい」と どうか貴方は 言わないで

手の荒れも 黙章だねと 笑い合う

しつかりと 人生の幕 見届けます

「どちらさま」ひとり息子は絶句した

先みえぬ トンネルに入る 介護かな

易怒性が 母の介護で 溶けていく

一步ずつ 頑張れじゃない 頑張ろう

覚悟して 親の手取つた はずなのに

河内坊

川の流れのように

川端 日出夫

川村栄

菅恵里子

かんかんかん

完熟きのこ

菅高栄

きーちゃん

キイロイトリ

木子

北美三風

きなこ

きなこのこ

気分は上々

キューと

キヨ

ぎょうまん

霧の小町

金太郎のじいちゃん

べーさん

もう一度声を聴かせてここにきて
いいでなら 話せるボクの 悩み事
静けさの 中で命を 織りかえる
父追つて 無上の母も また無常
100万回 言つても足りぬ ありがとう
ありがとうまだ言わないで傍に居て
旅立ちは 終わりじやないよ 「じやあまたね」
大丈夫 忘れられても 忘れません
便りない それが元気と 言い聞かす
天国は 逃げないだから まだ逝くな
居てるだけ 次会う時も 生きていて
何思ふ 春風に問う 最期の日
夢で会う それが最後になるなんて
母乗せて押す車椅子わが支え
もう居ない 母はまだいる俺の中
握る手に 温もり残し 旅に出た・・・
独りには させない母が 一人逝く
引き出しに 仕舞い忘れた俺の過去
諦めが 悪い親父が 俺は好き
消えそうな 吐息で紡ぐ ありがとう
補聴器の 替えの電池を 残し逝く

くうたろす
くがかん
愚月
草津亭
草取り名人
樋
熊猫太夫
くまのこ
ぐりむろ
けい
けいぢらう
ゲジなん
削鰹
月華
元気マーチやん
kensona
けんちやん
コアラ
こいちやん
こうちやんママ
」」」あ

諦めが悪い私はまだ生きる
学んだよ 命は急に なくなると
涙より 先に手を振る 夕しぐれ
握る手が 明日を生きると 物語る
無理せずに無理をしろよと療法士
すまんなと 詫びたことなき 父ぼつり
父の背に逝きたくないと書いて冬
支えるはず支えられてるこの現場
さよならも はじめましても 忘れない
「ありがとう」 こちらこそだよ 「ありがとう」
負けないで 特効薬は 君自身
なぜ言えぬ感謝のことば何故言えぬ
駆け抜けた 母のたすきは 受け取った
ありがとう だけは忘れず 逝った父
治療して 花見ができる ありがたさ
来年の桜はどこで見られるか
目を閉じた 母の頬には 子の涙
時が経ち 大事な人が 消えていく
まだ生きたい 思い出の地に また行きたい
忘れない あの日の時 あの景色
さくら

五香水貴
心笑
ココママ
コスマス
木立慈雨
ごつちよさん
琴乃夕月
coni
コバリク
こぼ
こまき
こめ
ごめんね
さいま
昆布
佐伯
佐恵子
沙緒翁
酒井一華
さかきんぐ

大変よ でもねこの手は 離さない

じつと見る 子になる母と にらめっこ

「死ぬもんか」 嘘が嫌いな 母の嘘

大丈夫 父のそばには 僕がいる

ありがとうございましたと声に出そうと決めました

帰り用 持ち込んだ靴 履かぬまま

いつまでも 子のままだった 母の前

見守りも 立派なケアと 知る夜勤

ありがとう 笑う陽だまり 泣きそうに

お姫様 抱っこする父 軽過ぎる

「もうお帰り」明日の仕事を気遣つて

俺のせい 摩った脛の 細さかな

初孫と 母が歩くよ 歩行器で

送られる日までは送る日を背負う

思い出は あなたの笑顔 あたたかい

母は言うゆつくり終わる幸せと

夜勤明け 布団で気付く 言い忘れ

最期だけ 約束破り 逝った父

ありがとう 心からでる そのことば

「まだ死なねえ」 笑って言うな 泣くだろが

いいんです 涙こらえて 側にいて

さくら

サクラモチ

さごじよう

佐々木

笹谷豊子

サチ

さっち

さと村

佐野美波

三郎

さんごしよう

じいじ

じいじ八年生

塩の司厨長

シオン

しかくいキャラメル

しきのみこ

しなやかーる

しばっち

記憶にはあなたひとりが咲き誇る

死ぬ予定 なかつたでしよう お義母さん

亡き妻と 今まで旅の 道連れに

歩けたね 昨日の涙 今日は花

大丈夫!! 笑顔のウラで 泣き叫ぶ

正解が わからぬままに 父看取る

中段に手をのべ母の担送車

母乗せて 押す車イス 父の杖

忘れても 毎日言うよ 大好きと

「ありがとう」よりも聞きたい 「バカヤロー!」

もう充分 母は何度も 繰り返し

もう一度 生まれて来ても あなたの子

幸せな 思い出だけの 今のは

認知症 揺れる記憶に そつと触れ

我が胸に 母は生きてる 咲いている

静寂の 病室に鳴る 埋時計

老いた手に 老いた手重ね 「ありがとう」

生かされず生きていく意志受け止める

眠つての 病床の母 泣き笑う

忘れ物 あなたは取りに行つただけ

島風ひゅーが

島根のぼん太

島村冬樹

ジヤック

ジャンボママ

手芸人

十猪

純生

笑

章香堂

盛水

祥雪

しようた

しょうび

食眠

白犬

シロー

しろくま

白髭

しん

たあに	太陽とそよ風	橙色の満月
沢庵	拓ちゃん	竹とんぼ
たこすけ	たつくり	たつくり
立田溪	田中時風	田乃無骨
たなか	たなか	たまさらち
たび	たまさらち	たまさらち
魂	たまのいわし	たまのいわし
たむぞう	たむぞう	たむぞう
たろう	たろう	たろう
団くるみ	団くるみ	団くるみ
ダンディムラムラ	ダンディムラムラ	ダンディムラムラ
蒲公英		

「おはよう」の父母（ちちはは）の声思う朝
名を忘れ 子まで忘れた 母がいる
「ありがとう」今日は何度も 言えました
寝る祖父のシロツメクサも摘めぬ指
違う名を 呼ぶ父のそば 寄り添つて
最期まで父は昭和の人でした
看取ること 寂しい辛い 代わりたい
話したいまだ伝えたいこれからを
いつからか 介護日誌が 恋文に
その傷が あなたの道を伝てる
亡骸を 抜け殻と言う おばあちゃん
生きている それすら悔やむ 身の不自由
私の名呼べぬ母呼ぶ何度も
痛いのは どことより財布 身にしみる
命とは 問い続けてる この場所で
孫あやし 遊んだ母が あやされて
車椅子 初めて乗った 父の顔
「何事も 急ぐな」言うて 何故急ぐ
あらどなた 子だと言えずに 手を握る
鍵かかる 病棟残し 母ごめん
母の手をさする不孝を詫びながら

ちうう
ちかちゃん
チセ
千船早帆
ちやこび
ちやつたマンゴー^一
ちやりんど
忠一
ちゅんすけ
ツキ
都冬夢
つばめ
つべる
ツルボン
テオジル
デシ
でじやぶー
てちにゃん
デッサン
デニム
手まり

血圧と 悩みをそつと 測る朝
握った手握り返してあります
贖罪を済ませて兄は旅立つた
窓の外見る横顔に父がいる
介護される 身にもあるぞよ 介護疲れ
その時が きてもあなたが いてくれる
この施設 いいねと母は 涙して
聴こえずとも何度も呼ぶ「おじいちゃん、」
忘れても いいよ私が 忘れない
見送つて 結ぶ最後の 親孝行
言わないで「幸せだった」まだはやい
車椅子 乗つて花見を 来年も
また明日 言つてくれるか 君の笑み
過去は過去 いいのそれでも する介護
また明日 言える幸せ 帰り道
泣くな俺母の自慢の息子だろう
廊下へと 涌れる嗚咽の 午前二時
孝行は不安な顔を見せぬこと
血管よ 逃げずにじっと そこにいて
父のいた ベッドの角度 戻せずに
命とは 問いかけながら 手を握る

てんちゃん
土居耿
都井の風
糖質無制限
豆風
桃李
棟六
とかげのしつぽ
朱鷺
道産子
となみ
とも
ともきつず
ともさん
とも蔵
とよ爺
どらまにあ
ナインナース
なおきん
なかむら

夜勤明け 疲れた顔に咲く笑顔

静かなる ガンコ親父の オムツ替え

祖母座椅子道行く人をただ見てた

ごめんねと言わせてばっかりでごめん

ありがとう 届かぬままに また一日

買えません健康という財産を

母の声母の手母を思い出す

また来てね 帰りたいとは 言わぬ父

素つ気ない『ありがとう』でも『ありがたい』

ありがとうございます その一言が 明日の糧

生きる意味 あなたの笑顔 守りたい

薰風にあなたの気配感じ取る

ひつきりなし 昼夜を問わず 鳴る電話

大部屋の 夜半の遠慮の 咳ひとつ

諦めじや ないぞ！覚悟だ！ いざ病！

忘れない 現場に感謝 あの世でも

生きつくしなお生きつくし眠る母

臨終に零れ落ちてくありがとう

点滴を引きずりながら花見道

手と手と手 独りじやないよ 僕もいる

なから
鳴き砂

なし
夏島有

夏蜜柑

奈菜子

七瀬 棕

ななな
なみや

なゆた
なるち

南平太
和心

なゆた
なるち

南平太
和心

なゆた
なるち

南平太
和心

西大路湖山人

ぬえ
温水ふみ

ぬえ
猫ザウルス

ぬえ
ねこ77

ぬえ
ねこまき

ぬえ
猫柳

のぐろっけん

来ていな娘が来たとはしやぐ父
「いたい」より 「会いたい」と父 子に伝え

何をすれば 覆水盆に返るのか
泣きながら 笑顔つくった 夜勤明け

夜勤明け シャワーで気付く 伝えなきや
父さんの駄洒落も一度聞きたいな

泣きながら 笑顔つくった 夜勤明け

白衣の戦士
はしやぐ年子の心

はしだせり
ぱせり

骨細る 母の髪梳く 春の風

笑つて欲しくて私笑つてる

痛くても 父は笑顔を 絶やさない

背を撫でる背負つてくれた人の背を

親指に 残る温もり 母の脈

肺の壁痛さ伝わる息の音

力なく 握る手の荒れ 母の生

病床の父案じつつ葱は伸び

立ち上がる勇気のそばにいつもいる

なあオヤジもう頑張らなくていいんだよ
冥途行く待合室は混んでいた

生きたいと 願う心が 生命線

さよならは 言わない今日も また明日

先生の その一言で 救われる

他愛ない会話心が泣いている

ノソノソ

のりのり

はかま

はるちゃん

はるはる

はるはる

はるはる

はるはる

もういいよ ゆっくりしてよ 休んでよ

はるま
はるやす

「まだ大丈夫」 強がる父の 手が震え
緊急は想定外の顔認証

枇杷
びわしゆ

笑みながら 母は置いてく 涙の子
その時が 今だと知つて ただ縋る

ハル
万愚節

辛くとも 泣かない母の 嬉し泣き
何度でも あなたがくれた 名を教え
死んでも死なん!と約束したじやない

ファンタ爺
ぶー

共倒れデイサービスに救われる
笑つてる 泣くな泣くなと 父の声
はじめからやさしい声の人でした

ばんぶー
ばんぶりん

死んでも死なん!と約束したじやない
あまのじやく 逝つていいよと 言つてない
メモの裏 そつと書かれた 「ありがとう」

ブーちゃん
深澤 健聖

ああ泣けない 泣けなかつたと 嘆きたい
丸くなる父の姿に襟正す

畢
ピーコック

はるま
はるやす
番号で呼ばれて我と気がつかず
「元気だよ」消灯前の電話口

不屈の屈葬
ふくろう悠々

縛られど なおも探して あの頃を
しゃべれない あなたの気持ち 届いてる

翡翠
ひいな

神に乞う!逝かすな母を まだ早い
母背負い 肩に零の わすれもの

ふけ老人
ふじちゃん

吸飲みや役目を終えて息をつく
分かつてる 覚悟もしてる けど逝くな

水川葱味噌
ひつぐべいびー

泣かないと 決めて隠れて 涙する
ボクの為怒鳴つて泣いてくれた父

不詳の息子
布拉ックココ

欲つされて ほつとした顔 ほつとする
毎日が 母と私の 最初の日

日付日和
ひでじい

手を握り 時よ止まれと 念じた日
ありがとう 守つてくれた 大きな手

ふわふわ
プラックココ

母の背を さすって戻る 幼き日
言うてきや! 愚痴も辛さも 楽しさも

翡翠
ひでぽん

逝く日まで 頑固な父を 演じ切る
「死んだんか?」 目覚める父に 「生きてるよ」

水分のさくら
蛇のとぐろ

夏祭り花火見つめるガラス越し

日々平和
一二三文

文案堂
ありがとう 守つてくれた 大きな手

文案堂
ふわふわ

世話をする 私に母が 世話を焼く
思い出を いっぱい備蓄 放さない

風信子
ビリケン真

生きざまがその逝きざまが道しるべ
同室の患者同士の同志感

歌井ぼうかる
ホーリマン

車椅子の母が見上げる初桜
最期まで痛いと言わぬ父でした

ひろP

最後まで痛いと言わぬ父でした

天国で親父が叫ぶまだ来るな

北房あさゑ
ポコあペコ

どの神も 人を殺せと 説いてない

足腰の分まで口は良く動く

車いす母と思い出乗せて押す

名も顔も 忘れられても 父は父

母を看取り家を見取りて父冥す

ありがとう拙い文字に涙する

苦しみを隠す優しさ君らしさ

この人の命預かる介護人

逝かないで 唯一無二の お母さん

一番の 特効薬は その笑顔

もう泣くな俺の余命も半分こ

抱かれた母を抱えて車椅子

孫と呼ぶ その子は君の 子供です

看護され 看護しようど 決意する

この皺がぼくを育ててきた証

さヨウナラそしてあなたへアリガトウ

謝るな 心配するな 気にするな

母が逝き 逝かぬと言つた 父逝つた

満開に母を誘つて車椅子

真夜中に 帰宅願望 私もです

子が見えぬ母の瞳に子は映る

星新

ぱっくん

ほのぼの

ぼわろ

まーきん

真壁真治

まさみ

マジかよてつちゃん

松庵

松依花奈

マツサン

まつさん

マッキー

松田少納言

まつさん

松村波光

まつもともとこ

真夏日

招き猫ひーちゃん

豆の蔓

迷い猫

茉莉亜まり

告知された あなたの明日を 手伝おう

年令を 「もう」と「まだ」とで 使い分け

ありがとう 何度言つても まだ足りぬ

母さんを 宜しく頼む 逝くな父

聞けたら 父の小言を もう一度

あんただれ 今日も始まる 自己紹介

俺は父 父は俺なの おばあちゃん

先生に 話す練習 昨夜から

できぬこと カルテに書けず 抱きしめる

待ちわびた 退院の日に 友の顔

命継ぐたつた1錠 託された

まだ呼ぶなやりたい事が山と有る

「ありがとう」それは私のセリフでしょ

忘れない 私の母は あなただけ

見届ける 生き切る母の ラストラン

母が逝く私に笑い皺遺し

握る手に 脈と願いの 鼓動聞く

そばにいる それがわたしの できること

失声の 私の想い さあ届け

忘れてこそばにいるから生きていて

嗚咽から 溢れ出てくる ありがとう

みゆきち

麻呂

万年幹事

みかん

みかん

ミサキラブ

みこちゃん

ミナト

ミニトマト

ミナト

みつちゃん

三編

三清

ミフア

宮のふみ

みやび

深雪

—

記念日を 避けて優しい 母が逝く
この時を集う命が生きている
できないが できるに変わる 喜びよ
恩返し 私は何が できるのか
ドアが開く そこに貴方が いて欲しい
不安でも なんとかなると 信じてる
寄り添つてただ寄り添つて側にいる
またあした そんなあしたが くればいい
「ありがとう」は わたしがママに 言う言葉
父よ待て どうか着くまで 逝かないで
病室に 差し込む光 生きる意味
てふてふに乗れたか母よ 「また明日」
言わないで 遺影になんて まだ早い
抱きしめる 母の着替えに ある温み
生き地獄 生きてほしいと 願う夜
亡き父の 最後の言葉 母頼む
腰曲がり首曲がってもへそ曲げず
ひたすらに 生きた親父の 太い文字
四季巡り死期迫り来る日々を抱く
ありがとう もっとと言わせて ありがとう
言い聞かす 慣れに慣れるな 我が看護

みらいむ	おんぶした
みれままで	母は軽くて あたたかい
みわ	母ちゃんよ ライスカレーを もう一度
みんとと	祈るのみ 生きる灯火 明ける夜
みんみん	母がしてくれた通りに母を抱く
みんみん	トイレまで今日もふたりの旅をする
みんみん	何度も 父の子として 生まれたい
みんみん	お母さん 窓の桜が 呼んでるよ！
ムギ	誰がやるもう動いてる手と手と手
ムギ	また来るね 祖父と交わした もうこぬ日
ムギ	点滴の リズム重ねる 母の息
ムレチコ	ありがとう なんて言うなよ まだ早い
ムレチコ	父と母 初めて見せた 泪顔
ムレチコ	幾度でも 笑顔で聞くよ その話
ムレチコ	一匙に こもる優しさ かみしめる
ムレチコ	親父さあ 笑い過ぎだよ 遺影写真
ムレチコ	「ありがとう」いや、こちらこそ ありがとう
ムレチコ	三途の川行くな渡るな舞い戻れ
ムレチコ	助からぬ 悟って尚も 尽くす人
ムレチコ	あと一匙食べて食べてと目が挙む
モモンガ	忘れない母の最期の深呼吸
モモンガ	桃乃茶 桃太郎 物見遊山 もち代ママ めろん茶 木星

モントカルロ やーくん
八木 五十八 安田 蝷牛
箭田儀一
やつち
八十日目
やぶさめ。
やましよう
やまととろ
やまとも
やまとゆう
やまびこ
やまびと
山法師
ゆう
ゆう
由羽
夕凪
郵呆

笑つてよ 独りじやないよ 僕が居る
おはようと 明日また言える それだけで
帰ります いつたい何処へ ここは家
小さな手、生まれてくれて、ありがとう
忘れない あなたがここに 生きたこと
握手した次の朝にはもういない
寄り添つて くれる優しさ 特効薬
笑い合う友又一人先に行き
星になど ならなくていい 逝かないで
「あんた誰?」と言われるけれど母は母
ありがとう当たり前ではない介護
忘れても 何度も言うよ 私の名
ひとしづく こぼす弱さも 抱きしめる
できしたこと 数え治して 春を待つ
人体を 創りしものよ 図面くれ
無くせない 記憶を糧に 今生きる
もう少し 喧嘩したいよ 時止まれ
天寿まで生きたと言えるがん連れて
あつたかい 子の手に引かれ 散歩道
耳遠い母に心を近づける
「帰りたい」 その言葉胸 締め付ける

ゆうゆう ゆーらら ゆかり 雪男 ゆまち
夢糸 ユメ吉 夢希望 夢子 夢恋士 夢まくら
夢希望 ユメ吉 ゆまち 雪男 ゆまち
夢糸 ユメ吉 夢希望 夢子 夢恋士 夢まくら
夢希望 ユメ吉 ゆまち 雪男 ゆまち
夢糸 ユメ吉 夢希望 夢子 夢恋士 夢まくら
夢糸 ユメ吉 ゆまち 雪男 ゆまち

息の音深夜病棟朝を待つ
見送る父もう会えないと分かつてた?
髪は抜け されども君は 変わらない
時は金 いいえ命だ 離れない
笑うこと それはみんなを救うこと
まだいえぬ みとめたくない さようなら
話したい 離したくない 君のこと
始まりも 終わりも頬の ひとしづく
父に詫び母にも詫びる父の通夜
後悔の ない介護など ないこの世
そばにいる事しかできぬされどいる
人生(たび)の最期 看させてくれて ありがとう
手を引かれ 通つた道を 手を引いて
母であり同志であつて母だった
引いた手が 母の苦労を 語りだす
百歳の 母がほほえむ 春の夢
生と死の 狹間戦う 戦士たち
病床で 母の靴音 父が待つ
日記帳 かすれた文字の 「ありがとう」

「もう」と「まだ」くりかえすだけ 「もう」と「まだ」
ラーテル よもぎ春子 淀太郎 吉田 天 横ちゃん
瑠珂 ルカママ ルルル 老人生 ろくすけ わいわい
和香 わらび わんこなり



CO1(シーオーワン)ソニック電動歯ブラシ

奥歯の裏側まで心地よく磨ける
4時間充電で20日以上使える
抗菌設計・完全防水
31000ブラシストローク/分

